

保健福祉センターからのお知らせ

乳幼児対象

麻しんおよび風しん(MR)の予防接種

最近の麻しんの全国的な流行を受け、厚生労働省および地方自治体では、平成24年までに麻しんの排除を達成するという目標に向け、「麻しん排除への地域運動」を進めています。そのため、ワクチンの接種率を上げることが重要とされ、接種対象者を中学1年生および高校3年生とし、5年間の限定で拡大することになりました。接種日近くになりましたら対象者に通知しますので、注意書きを熟読し接種してください。

■予防接種の対象

- 【1期】生後12か月～24か月未満
- 【2期】小学校就学前
- 【3期】中学1年生相当年齢
- 【4期】高校3年生相当年齢

※なお、2～4期の対象は今回限定ですので注意してください。(例えば2期の対象で今回接種しない児が中学1年生になった時には接種できません)

■実施日程

実施予定日	平成20年度対象者			
4月14日(月)～ 4月26日(土)	平成19年 3月生	平成14年 4・5月生	平成7年 4・5月生	平成2年 4・5月生
5月19日(月)～ 5月31日(土)	平成19年 4月生	平成14年 6・7月生	平成7年 6・7月生	平成2年 6・7月生
6月16日(月)～ 6月28日(土)	平成19年 5月生	平成14年 8・9月生	平成7年 8・9月生	平成2年 8・9月生
7月14日(月)～ 7月26日(土)	平成19年 6月生	平成14年 10・11月生	平成7年 10・11月生	平成2年 10・11月生
8月18日(月)～ 8月30日(土)	平成19年 7月生	平成14年12・ 15年1月生	平成7年12・ 8年1月生	平成2年12・ 3年1月生
9月16日(火)～ 9月27日(土)	平成19年 8月生	平成15年 2・3月生	平成8年 2・3月生	平成3年 2・3月生

■麻しん・風しんの症状について

▽麻しん

麻しん(はしか)は、麻しんウイルスの空気感染・飛沫感染・接触感染によって発症します。ウイルスに感染後、無症状の時期(潜伏期間)が約10～12日続きます。その後症状が出始めますが、主な症状は、発熱、せき、鼻汁、めやに、赤い発しんです。症状が出始めてから3～4日は38℃前後の熱とせきと鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりがけたかと思うと、また39～40℃の高熱となり、首すじや顔などから赤い発しんが出はじめ、その後発しんは全身に広がります。高熱は3～4日で解熱し、次第に発しんも消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

合併症を引き起こすことが30%程度あり、主な合併症には、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあります。発生する割合は麻しん患者100人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約6人です。**脳炎は約1,000人に1人の割合で発生がみられます。**

また、麻しんにかかると数年から10数年経過した後に亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という重い脳炎を]発症することがあります。これは、麻しんにかかった者のうち約10万人に1人の割合で見られます。

麻しん(はしか)にかかった人のうち、1,000人に1人程度の割合で死亡することがあります。

▽風しん

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染のよって発症します。ウイルスに感染してもすぐには症状が出ず、約14日～21日の潜伏期間がみられます。その後、麻しんより淡い色の赤い発しん、発熱、首のうしろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。また、そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなる(眼球結膜の充血)などの症状がみられることもあります。子供の場合、発しんも熱も3日程度で治ることが多いので「三日ばしか」と呼ばれることがあります。合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風しん患者約3,000人に1人、脳炎は風しん患者約6,000人に1人ほどの割合で合併します。大人になってからかかると子供の時より重症化する傾向が見られます。

妊婦が妊娠早期に風しんにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気になる、心臓病、白内障、聴力障害などの障害を持った赤ちゃんが生まれる可能性があります。